学びや タイムスリップ

足踏みで送る空気震わせ

15年ほど前までは、どこの学校にもあったリードオルガン（足踏みオルガン）。現在では電子オルガンが主流になり、リードオルガンの音は学校ではあまり聴かれなくなりました。

日本におけるオルガンの歴史をたどると、「唱歌」教育の歴史と密接に関係していることがわかります。つまり、小学校の授業でオルガンが用いられることによって、世にオルガンが広まったのです。

京都では、1877（明治10）年ごろから同志社女学校や京都女学校（後の府立第一高等女学校）で音楽教育が行われていたこともあり、小学校でも1887（明治20）年という他の地域よりも比較的早い時期から「唱歌」の授業が行われ始めます。オルガンは当時高価でしたが、地域の人たちの寄贈などによって次第に小学校に導入されていきました。

写真上はリードオルガンの一種、「燭台付風琴」で、明治末期（1910年ごろ）から広まった大型の国産オルガンです。「燭台」とは、左右に付いているろうそくを置ける小さな台のことで、こうしたきれいな飾りは昔の高価なオルガンによく見られます。「風琴」とは、リードオルガンのことです。

なぜ「風琴」というのでしょうか。答えは、足でペダルを踏んで風を内部に送り込み、その風でリードという部分を震わせて音を出すからです。「風で音を出す琴」ということですね。ちなみに、アコーディオンは「手風琴」と呼ばれていました。

このオルガンは1910（明治43）年製。ヤマハの国産第16号型で、京都市内の幼稚園や小学校で使われたと確認できるものでは現存最古です。同年、日彰幼稚園（中京区、96年閉園）の新築園舎落成式にあわせて、日彰学区の一宮家から寄贈されました。

寄贈者として記録されているのは大人ではなく、この年に日彰尋常小学校（中京区、現高倉小）を卒業し、府立第一高等女学校に入学したばかりの一宮道子になっています（写真下）。一宮道子は後に「おかえりのうた」や「おかえりのうた」など幼児向けの歌を数多く作曲しました。

皆さんの近くに、もしリードオルガンが残っていたら、ぜひその「風の音」を聴いてみてください。

（京都市学校歴史博物館 学芸員 和崎光太郎）

◇

今回紹介したリードオルガンは学校歴史博物館で展示されています。録音音源によって、その音色を展示室内で聴くことができます（水曜休館）。

上燭台付風琴（1910年製、元日彰幼稚園蔵）下オルガンには「明治四十三年三月寄附 一宮道子」と書かれている